

授業の補充

2020. 6. 5

福島県の県立高等学校は、4月21日（火）から5月24日（日）まで臨時休業となった。この間の授業日は20日間である。5月25日（月）から学校の教育活動は再開されたが、どこかでどうにかして授業を補充しなければならない。そうしないと生徒の学習量を保障できない。

臨時休業期間中、生徒は家庭学習として与えられた学習課題に取り組んでいた。登校日には、学習状況を確認し、新たな課題の指示を受け、引き続き家庭で取り組んできた。また、本校の場合、5月18日（月）からは、生徒一人当たり2日に1回のペースで登校し、授業を行ってきている。

以上のことを勘案し、本校では10日間の授業日を新たに確保することにした。これは、県教育委員会からの指示でもある。確保のための方法は3つである。長期休業期間の短縮、土曜授業の実施、学校行事等の精選である。本校では、夏季休業期間を6日間短縮することにした。加えて、マラソン大会の中止により1日、小文化祭の中止により3日間の授業日を確保した。

本校のマラソン大会は、梁川で行われる三浦弥平杯ロードレース大会に梁川高校の部として参加する形態をとっている。この三浦弥平杯ロードレース大会そのものが中止となってしまった。本校の文化祭は、小文化祭と公開文化祭とがある。小文化祭は公開せずに校内のみで開催するものである。公開文化祭は、広く一般に公開するものである。

本校では、小文化祭、公開文化祭、そして体育祭を毎年ローテーションで開催することになっている。生徒は、3年間でこの3つをすべて経験することになる。今年度、小文化祭を中止とすればローテーションは崩れるわけだが、次年度に文化祭を実施できれば、現1年生と2年生は文化祭を経験することができる。現3年生は、1年生のときに、既に公開文化祭を経験している。文化祭は、高校生にぜひ経験させたい行事の一つである。

10日間の授業日の補充は、最低限の量的な補充である。授業の補充というと、量的な補充のことを言っているのが一般的である。量的なものは、日数としてカウントされるので一目瞭然で分かりやすい。量的なものがあるということは、質的なものもあるということである。質的な授業の補充とは言わないかもしれないが、重要な要素である。量的なものは、もちろん大切だが、質的な補充という視点も忘れてはいけない。質的なものはわかりにくいし、直接的には見えない。大切なものほど見えないものである。

質的な補充のポイントは授業を行う教員である。ひとえに教員の腕にかかっている。現在のところ、教員には逆風が吹いている。教室では生徒間の身体的距離を確保しなければならない。長時間のグループ活動はできない。そうすると、教員のトーク・チョーク・ワークの質を上げるしかない。トークとは説明や解説である。チョークは板書である。ワークはワークシートである。いずれも授業における重要な構成要素である。今までも当たり前のように行ってきたことではあるが、この状況下においては、これらの精度を今まで以上に上げなければならない。そうすることが、結果的に教員の授業改善にもつながっていく。授業が改善されると、誰が一番にその恩恵を受けるのか。それは生徒である。生徒の学力向上にもつながるわけである。真の授業の補充は、一にも二にも教員の双肩にかかっている。